

パンタナール通信

南北米福地開発協会 会報 第1号 2003年10月12日発行



パンタナール湿原を流れるパラグアイ川



神山威会長挨拶

皆様のお陰で、未開の地からのレダ開発も10月1日で4周年を迎えました。今までは正に開拓基
地作りの期間でした。これからのいよいよ奥地に向けての新たな5年目が始まりました。海軍警備所を国に献納し、40メートルからのアンテナ塔を建てて通信の便宜を図ってあげ、ボート90馬力（5人乗り）を献納して、国境警備と共に、無医村地域故に地方の救急患者の輸送にも役立つ感謝されてきました。間もなく警察署及び宿舎が献納されるでしょう。こうした安全を確保しながら、地域に貢献しつつ、レダ8万ヘクタールの開発に向けて、基地作りを進めてきました。建物としては、国際セミナーハウス（300人宿泊可、図書室、コンピュータ室併設）、レストラン、プール及びシャワー室、ゲストハウス二棟、労働者用も含めて宿舍五棟、ジエネレ・ターハウス、浄水場2棟、給水塔、牧童小屋、労働者用食堂、家畜の集荷場、更に設備として小規模農場、植樹園（2万坪、1550本植樹）、現在牧場建設（約1万ヘクタール）が進められています。またレダはパンタナールに属する自然豊かな地域ですから、環境問題は 公害を出さない、自然保護を積極的に進めていくことを念頭に取られています。自然観察や釣り、乗馬、水泳などのスポーツが楽しめる観光にも最適なまれにみる秘境です。国際会議なども出来ます。毎年行われている国際協力青年ボランティア隊の活動も好評です。国力が弱いため、電気も浄水場もないこの地域の村の人々の大歓迎はもとより、参加した青年達も現地の学校建設と文化交流を通して、人生の新たな希望と国際貢献の重要さを認識してきました。如何に地域のため、国のため、世界のために尽くすか。平和な地球村建設に向けての一石を投じてきました。皆様の尚一層のご理解とご協力を賜りますれば感謝です。そして是非レダにお越し下さい。心からお待ちします。

研修会 (毎月一回)



入会案内

南北米福地開発協会は南米パンタナールを中心とした様々なボランティア活動を行っています。詳細は事務局へお尋ね下さい。又、入会申込み書及びパンフレット等のご案内は事務局に用意してあります。入会されて、毎月500円の会費を納められた方には「パンタナール通信」、講演会、エコツアー、研修会などの催しや、会の様々な情報を毎月お送りします。

南北米福地開発協会事務局
〒150-0001

東京都渋谷区神宮前6-19-14

神宮前ハッピービル10F

電話番号03-5774-0544

ファックス03-3407-0145

担当 柴沼邦彦

第4回国際青年ボランティア隊報告

(2003年8月25日-9月14日)

南米パラグアイ国パンタナール地域ディアナ村小学校建設



希望と多くの支援物資を携えて成田空港を8月25日出発

隊長

三石昭治 (南北米福地開発協会)

副隊長 中田勝尊 (横浜国大)

男性隊員

白井啓文 (協会会員)

児島琢磨 (鹿児島国際大学)

野村安弘 (東京農工大修士)

東森孝勝 (エール大学)

矢島久裕 (協会会員)

筒原良昭 (協会会員)

女性隊員

戸石清子 (日本福祉教育専門)

染谷和美 (産業短期大学)

黒田誉詩美 (常盤大学)

吉田晴美 (世界女性連合会員)



ディアナ村小学校の校舎建設 (土台造り)



レダ農場にて植樹活動 (各自の記念植樹をする)

三石隊長総括報告

今年の奉仕隊の活動舞台は、パラグアイといっても、ブラジル、ボリビア3ヶ国の国境が重なる地点に近い、バイヤネグラという町の隣接地でポエルト ディアナというインディオ村落であった。約260世帯、千五百人ほどのチャマココと呼ばれる部族の人々が貧しい生活をしている。昨年の青ボ隊の活動舞台となったエスペランサ村より、パラグアイ川を更に30キロメートルほど遡った場所である。

今まで継続して行なってきた青ボ隊の体験を通して、村の人々の生活の貧しさをまざまざと目撃する事が出来た。青年たちの目はまずそうした人々の衣食住の貧しさに向けられ、驚きかつ戸惑うのであるが、同時にそこに住む人々、特に子どもたちの生き生きとした明るさには更に驚かされるのである。いまだきの現地はかなり肌寒い日もあるのだが、十分な衣服も着けず、しかも裸足の子達がなんと多い事か。そんな子どもたちが毎日青ボ隊員のいる所にやってきて、一緒に遊び労働も手伝ってくれた。ある隊員は一日、体不調で休んでいた時、気遣って部屋に来てくれた子どもの優しさに涙を流した。奉仕隊がかかわった労働は、ちょうど校舎の基礎が出来、床となる部分にコンクリートを打ち込む段取りの時だった。ミキサーでこねる砂利や砂、セメントを運ぶ作業とそれぞれを定数ずつバケツに入れる作業など、慣れない力仕事に皆玉の汗を流した。男性たちには校舎の周りに土寄せした場所をつき固める作業も特別にあてがわれた。このヨイトマケ労働は彼らの筋肉を翌日から痛ませたが、この痛みがこの活動に参加した満足感を増加させたようでもある。

炎天下の作業のほか、子どもたちに教えた朝の授業が始まる前のラジオ体操、折り紙教室の楽しい触れ合いが強い印象に残った。夕食後、夜の反省会はひとり一人のボランティア活動に対する意味と価値の認識を深めていくよき場所となった。環境、事情の違いからの驚き、感動を越え、彼らが目にした現実の由来を考え、どのように変革し改善してゆけるのか真剣に考え始めるようになってくる。

奉仕労働で汗を流し、人々との触れ合いを実際に体験した後でのみ入って行ける貴重な心情の領域であるに違いない。

今年も今まで三回の活動時と同様、またそれ以上に南北米福地開発協会の神山会長始め、世界平和女性連合、国際レインボークラブ、ヤクルト(株)、日本救援衣料センター、一心病院など多くの関係者の方々から多大な配慮と協力を賜った。

心からの敬意と感謝をお捧げ申し上げたい。以上